

## 「信仰による義」

ローマの信徒への手紙 1:16-17

今日、10月31日は「宗教改革記念日」です。この日は、日曜日になることが少ないので、教会の礼拝であまり取り上げることはないと思いますが、今年は丁度日曜日にあたりましたので、宗教改革、ことにルターの宗教改革のことを中心にお話ししたいと思います。

この10月31日という日は、マルチン・ルターが、ドイツのヴィッテンベルクの城教会の扉に95箇条の提題(質問状)を張り付けて、宗教改革の火ぶたを切った日です。1517年、今から504年前のことです。当時の教会は、ローマ教皇が絶対的な権限をもって全ての教会を統治する一つのまとまった教会でした。それが、普遍的とか公同的という意味で「カトリック」と呼ばれていた教会です。

この教会が、ローマ政府によって公認されて以来宗教改革まで、1,000年以上もの間続いてきたということの背景には、ローマ教皇(法王)に絶対的な権限があり、この教皇のもとに、ピラミッド型の強固な組織が造られ、その命令系統が末端の教会の一人一人の信徒にまで行き渡っていたためでした。その教皇の権威とは、当時、聖書の権威よりも上にあって、教皇が認めた範囲内では、聖書を解釈することが出来ないというものでした。ですから、ですから少しでも、教皇の認める聖書解釈と違う理解をしたり、異なる教義を説いたりすると「異端」とみなされて処刑されることがありました。また、教会の教えに反したり、風紀をみだすと思われる者は「魔女」とみなされ、火あぶりの刑に処せられることがあったのです。

そのような中で、一修道僧であったマルチン・ルターが「95条の提題」と呼ばれる問題提起を公にしたのです。これは、当時としては実に勇気のいる大胆な行動でした。ルター自身は、初めから、「宗教改革」を行うという大それたことを考えていたわけではなかったようです。彼は当時、神学者たちが神学的なことで討論する時に、いつもそうしていたように、城教会の扉に自分の意見と考えを率直に95項目にわたって書き記したものを張り付けたのです。しかし、その内容が、当時のローマ・カソリック教会の様々な間違いを正す内容のものであっただけに、それが激しい議論を呼び、またたくまに多くの人々の間に広がり、大問題となったのです。

ちなみにその95条の第1条にどんなことが書かれていたかということ、「我らの主にして師なるイエス・キリストが『悔い改めよ』と言われた時、主は信じる者の全生涯が悔い改めであることを欲したもうた」というものです。つまり、キリスト者は、主の前に常に悔い改め、新しく生きることが大切だ、ということです。

これは、その後の条文から分かるように、明らかに、悔い改めのないままに、旧態依然として、間違っただけの仕来りを保ち続ける教会のあり方、教皇庁のあり方に対する批判的な問いかけでもあったのです。政権でもそうですが、一つの権力が長く続くと必ず腐敗が生じるものです。

ルターがこの「提題」で特に問題にしたのは、「贖宥券」(免罪符)発売の問題でした。これは、聖ペテロ大聖堂の建築資金を獲るために教皇庁が始めたものですが、要するに「天国行きの切符」の発売です。この切符を買えば、亡くなった親たちが、煉獄(死者が神の裁きを待っている場所)から解き放たれて天国に行ける、という触れ込みで、街中練り歩いて宣伝し発売したのです。ルターが問題にしたことは、大聖堂を建てることでも、そのための資金を募ることでもありません。教皇に煉獄にいる死者たちの罪を赦す権限があるのか、ということです。「贖宥券」なる切符を買わせて、そのお金で亡くなった人の魂を天国に送ったり、地獄に落としたりするような権限は、教皇にはないということです。もし、そんなことが出来るなら、主イエス・キリストが、私たちの罪のために十字架にお掛りになった意味がなくなってしまうことになります。

この贖宥券の過ちの一つは、そのような教皇の権威の絶対化にありましたが、それと共に、人は何によって救われるか、という救いの条件に対する当時の教会の理解が関わっていました。つまり、当時のカトリック教会は、救いは善行を積むことによって獲得するもの、という考えに基づいていたのです。つまり「神の恵」より、人間の功績に救いの条件が置かれていたのです。ですから、贖宥券をたくさん買えば買うほど、天国に行けるという確率が高くなるという安易な教えが説かれたのです。

修道僧であったルターも、当初、救いは善い行いを積むことによって獲られるものという当時の教会の教えに基づき、厳しい修道院の規則を誰よりも熱心に守り、修行に励んだのです。しかし、ルターは、修行に励み、善行を積みば積むほど、自分の徳を誇り、自己満足しているような、自分の内にある罪に気付かされて深く悩み、救いの確かさが得られなかったのです。当時、ルターは、「神の義」という言葉に恐怖を感じていました。「神の義」(神の正しさ)は、罪人である自分にとって、「神の裁き」としか受け止められなかったのです。ですからその頃ルターは、「神の義」という言葉を読んだり聞いたりする度に、「神の怒り」を思って、「おお、わが罪、わが罪、わが罪」と胸を打って悶えるほどだったのです。

そういう深い罪意識の中で、彼は夢中になって聖書を読み、少しずつ慰められ、神の義の中にある神の愛に気付かされ、聖書こそ唯一の拠り所であり、権威であるということを確認するようになったのです。その決定的な言葉との出会いを、彼は「塔の体験」と呼んでいます。それは、ある日、修道院の塔の中で聖書を読んでいて、示された

ことでした。それは、先ほど読んで頂いた聖書、ローマの信徒への手紙1章17節の箇所をから、示されたことでした。17節をもう一度読んでみます。「福音には、神の義が啓示されていますが、それは初めから終わりまで信仰を通して実現されるためです。

『正しい者(義人)は、信仰によって生きる』と書いてある通りです」。この言葉から、ルターはまず、「神の義」は、罪人を裁く義ではなく、「福音」(良きおとずれ)であり、信仰を通して与えられる神の恵みである、ということに気付かされたのです。つまり「神の義」は、罪人をただ裁く義ではなく、罪人を赦し、罪人を義とする神の恵みであるということです。「罪人」を「義人」として受け入れてくれる。それが「神の義」であるということです。勿論この背後に、神の御子イエス・キリストが、私たちの罪を担い、私たちに代わって十字架に掛かり、罪を贖ってくださったという恵みがあるわけです。このキリストの十字架と復活を信じる信仰によって、罪ある私たちが神さまによって「義」と認められるのです。これが「信仰による義認」ということです。私たちはただ、キリストを信じる信仰により、恵みによって救われるのです。これが、ルターが「塔の体験」を通して新たに確信したことでした。彼はこの体験を通して、自分の善行を積むことによって、自分の力で「神の義」を掴み取らなければならないという当時支配していた呪われた考えから解放されたのです。

この体験を通して、ルターはあの「贖宥券」に対して、「それは違う!」ということが出来たのです。救いは、神の一方的な恵みによって与えられるもので、切符を買うと言ったよう人間の善行によるものではないということです。ルターは、「塔の体験」を通して、罪の赦しの確信を与えられ、神から義と認められた者としての自信をもって、新しく力強い信仰の歩みを始めたのです。その頃書かれたルターの文書の中に「信仰は、私どもの内に働く神の業であって、私たちは新しく生まれ変えられるのである。… おお、生き生きとして活動的なものこそ信仰である」と述べています。この信仰による活力がああ宗教改革の原動力になったのです。

先ほどのローマの信徒への手紙の中に「正しい者(義人)は信仰によって生きる」とありました。これは旧約聖書ハバクク書2章4節の引用ですが、まさに、信仰によって神さまから与えられる義は、何ものをも恐れずに、間違いを間違いとし、正しいことを正しいとする真実な生き方をもたらすのです。

95箇条の提題を公にしたルターは、ローマ皇帝から何度もその提題を取り消し、これまでの発言を撤回するように命じられますが、彼は「私は聖書に基づいて、正しいと思うことを述べたまでです。たとえ教皇といえども、聖書に基づいて自分の過ちが証明されない限り、取り消すことは出来ません」と拒否したのです。そのために、ローマへの出頭を命じられ、そこでも取り消しを命じられるわけですが、応じないためにル

ターはついに「異端者」として、ヴォルムスで開かれた国会に召喚されることになったのです。友人たちは亡命を勧めるわけですが、ルターは「たとえ、その街に屋根の瓦ほどの悪魔がいるとしても、私は真理を明かすためにそこへ行こう」と語ったと伝えられています。先ほど讚美歌 377 番をご一緒に歌いましたが、その讚美歌はルターがこのヴォルムスに向かう途上、自ら作って歌った歌とされています。

1) 「神はわが砦 わが強き盾、 / すべての悩みを 解き放ち給う。

悪しきものはおごりたち、 / よこしまな企てもて 戦いをいどむ」

2) 「打ち勝つ力は われらには無し / 力ある人を 神は立てたもう。

その人は主キリスト、万軍の君、 / われと共に 戦う主なり。

このようにして国会に向かったルターは、皇帝の前で、改めてこれまで語って来たことや書いてきたものをすべて取り消すように命じられたのですが、ここでもルターは「聖書に基づき私の過ちが立証されない限り取り消しません」と答え、「私の心は神の言葉に固く結ばれている。わたしは自分の良心に反することは出来ない。私は何も取り消し得ないし、取り消そうとも思わない」と語った後、「私はここに立つ、神よ、私を助けたまえ。アーメン」という有名な言葉で、答弁を結んだそうです。

議場は騒然として、いよいよ死刑の判決が下されるかと、人々は固唾をのんで見守ったのですが、ルターの主張に共鳴する人たちが多く中で、さすがに処刑することは出来なかったようです。釈放されたルターは、彼に賛同するある領主にかくまわれ、その城で、ラテン語聖書をみんなが読めるドイツ語に訳し、多くの著作活動を為し、教会改革の業に専心したのです。

ルターの宗教改革の特色は、「聖書のみ」「信仰のみ」「万人祭司」という三つの言葉で要約されますが、これは「聖書のみが唯一の権威であり、規範である」ということ。「人は、誰でも信仰によってのみ義とされる」ということ。そして「教職だけではなく、すべての信徒が等しく祭司の務めを担っている」ということを意味し、プロテスタント教会の基本原則と呼ばれるようになったものです。

パウロは、今日のローマの信徒への手紙の 1 章 16 節で、「わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシャ人にも、信じるものすべてに救いを与える神の力だからです」と述べています。パウロにしてもルターにしても、言えることは、どんな時にも、どんな人に対しても「福音を恥としない」ということです。そういう気骨のある生き方が、教会を革新し、この世を変えていったということです。私たちの教会はこのような改革によって生まれたプロテスタントの教会です。プロテスタントとは「抗議する者」という意味ですが、「告白する者」という意味でもあります。常に聖書のみ言葉に固く立って、力強くキリストを証しする歩みを続けたいものです。